

かずたま姫「三重の岡本夫人からの信号が強くなっています

モニターにピックアップしてみると映像が出てきました

数人で神示と絵画遺作展の準備の話のようです」

天明が、地上現界の様子をモニター映像で見せてもらうと、妻の三典は神示の解釈が一番気になっているようです。神示第一六巻・アレの巻の次の文章でした。

原文「アキニチ〇〇キテ〇九十百ノ一二〇ノ日ノ日ノ

日アノ〇〇〇三十 日十……」

解説文「吾基（安芸）時節来て、誠もの言う神の世の夜明けの神々

覚れよと……」

解説文「アキジセツキテ、マコトモノイフカミノヨノ、ヨアケノカミガミサトレヨト……」

三典は、「アキジセツキテ、マコトモノイフカミノヨノ」という下りで、「アキ」の解釈を「秋」のアキと考えていました。神示のアキは「広島」のことです。旧国名、安芸（アキ）の広島を「秋」と思ってしまうと、解決は難しくなります。

天明は三典にシグナルを送り続けました。広島、広島、広島と送り続けていると、連鎖反応が起きたのです。心の国では、三重の三典と広島のおサダ姫との心の縁結びがつる姫によってすでにできていますから、夫、天明のシグナルは、三重（三典）と直になって広島のおサダ姫にも届いていたのです。

広島の中の草がこれほど強い同調光を発し始めていることを考えれば、地上現界の三典とおサダ姫に具現化するのも早くなるのではないかと天明は思いました。

それから数日過ぎた冬の寒い日でしたが、至恩郷（三典）に、広島からおサダ姫たち数人が訪ねて来たのです。平成五（一九九三）年二月のことでした。それを機に、天明の絵画遺作展の話はにわかに変化しました。広島を会場に開催する案が持ち出され、五月十二日に、広島を会場にして日月神示の講義を要請されることになり、その講義が終了した後に、広島で開催しようとする天明絵画遺作展の日程を検討する運びとなりました。広島とのコンタクトは、こういった流れの中で急展開していったのです。

このように、心の国で起きていることは、地上現界でも起きてきます。このことを象徴することく、心の国にはいたるところに、

“いのちの裏時計”

という看板が立っています。

目には見えない時計の内面が時計の命であり、メカニズムであり、無数の担当部品たちの正確無比無休の働きがあればこそ、表の大針小針で現実を表示します。人体もまた同じことです。体内を構成する億万兆の細胞たち、二〇六本の骨、血管、神経、体液、脳、心臓、肺、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸、肛門、脾臓、肝臓、脾臓、卵巣、子宮、睪丸、大脳、小脳、間脳、脳髄、延髄、視床下部、脳下垂体、目、口、鼻、耳、舌、歯、喉仏に気管支、手足の指は二十本、頭の毛数十万本、陰毛、腋毛に胸毛：書きはじめたら何日かかるかわかりません。生命体の見えない体内では、すべてが相互信頼で、すべてが連携プレーです。それも正確無比無休で一切が自動です。内面のエネルギーは唯一天に結ばれています。そしてこの内面が「心の国」なのです。時計の針が動くのと同じで、人々の現実生活が流れている根幹が心の国にありました。心の国の喜びが、自分の喜びの表情となるのです。

このように、心の国ではそれに気づいても気づかなくても、動きが止まることはありません。止まれば暗黒世界。動きあればこそその現実があります。

「いのちの裏時計」に気づきはじめたとき、心の扉が開かれてきます。そのとき、万光の輝きとなり、平安の輝きとなり、無益な闘争の火が消える日がやって来ます。必ずやって来ます。

心の原点、生きる原点を開くことが、天明が取り次いだ日月神示第一六巻でいう、「いわとびらきなりなるぞ、まこといわとはとわぞ」

これこそが、日月神示の真骨頂でしょう。

岡本天明が取り次いだ一六年間の神示は主に数字と記号でした。ご縁というものはすばらしいもので、この神示を解読する作業に強力な助っ人が加わったのです。

昭和三四（一九五九）年七月七日、小田野女史との出会いです。画家、数学者、哲学者といつかめしい肩書を持った偉人でした。

小田野女史は、日月神示の核心を貫く一本の光は「ことば」（光透波）であると直言しました。「ことば」は神示でいう〇、△であり神であるわけです。また、数字の「九十八」に展開されます。さらに、九十八の和数は「九」であるとして、九こそ天の意すなわち、宇宙意志であり、いのちの本質であることを示されました。

このことを田之助の妻、いろは姫は、「九」を「食」だということです。九㊦クをクウにひびきを重ねて「食う」へと展開するわけですが、それほどの違和感はありません。

田之助が、タマヒロ社長と会話の後で急に唱えだした「わたしは原子」に戻ってみれば、ここでの「九と食う」という展開は自然の流れでありましょう。食といのちの循環リズムの中にこそいのちの本質を探る道筋があるといえるし、食といのちは同義と考えてもおかしくはないのです。

一呼一吸天の気

一食一排地の気

天地の気はいのちの食

食はいのちの呼吸なり

食はいのちの呼吸ですから同義同体なのです。

その「食って生きる」原点にこそ共振共鳴共時性の原理の世界が見えてくるといえます。いのちを神と呼ぶなら、食もまた神ということになりましょう。

さて、現実社会の動きも活発になってきているようです。三重の岡本夫人と広島のおサダ姫の関係も具体的に動き出しています。天明展も開始三四年目に当たり、日月神示発祥

五〇年記念です。さらに、原爆忌第四八回目の平和記念式典になります。

天明はつる姫のそばで客人の身分ですが、心の国の一連の動きに参加しています。ユングは共時性発現の現場に立って、その真髄に目を光らせています。

つる姫は、特命大使の任務もあとわずかで終了することを感じていました。天の声からいつ帰還の指示が降りるかわかりません。

天明が一九六三（昭和三八）年四月七日に心の国に永住してすでに三〇年となりますが、歳月感覚も年齢感覚もすでに消えていますから万年青年のようでもあります。原子の光の中にいるからです。天明は、妻の三典にも一度ここに来てもらおうと思い、往来許可申請を出してみることにしました。窓口はナビ大王です。

天明「ナビ大王様

妻、三典の往来許可の件でお願いしたいのですが

どのようなしたらよいでしょうか」

ナビ大王「天明さんの奥様ですね

必要事項はモニターで調べてから担当官にその旨伝えておきます

発行でき次第こちらから岡本三典様宛に直送いたします

少々お待ちください」

ナビ大王はパソコン申請で手続きを終え、ディスプレイの前でうなずきながら、ナビ大王「天明さん、手続き上の支障は何もないようです」

今、担当官から発行終了の合図が入りました」

かくして、岡本夫人も心の国に往来できることになりました。天明がそのことをすぐにシグナルで知らせると、妻の様子が一変していました。感応がすばらしく向上しているのです。一度心の国に来てみなさいとシグナルを送ったら、それから間もなく、三心クルーのもじたまの皇子が、岡本夫人からのメールが入っていることを天明に知らせました。

もじたまの皇子「天明さん、奥様からのメールです」

今からこちらまで来られるといえます

少しお待ちください」

何しろ初めてのことですから、天明は、妻、三典の動きをモニターでじっと食い入るように見ています。

現界から降りて来て、原子雲のベールの所で入ろうとした三典は、赤ランプが点灯し

て警告音が鳴ったからびつくり仰天しました。気を取り直して、往来カードを差し出すと、青ランプが点灯して入国OKのサインが出されます。天明は、いのち舟の中から「おい、こつちだ」と手招きで迎えました。

つる姫に許可をもらい、いのち舟を一旦降りて妻を迎えた天明は、光の長椅子までやってきて、二人で腰をかけています。

三典「こんなことができるとは思わなかった。うれしいこと！

それに凄く明るい世界ね！」

天明「一度僕がいるところを見てほしかったんだよ」

三典「いつもはサインのシグナルで会っていましたから

こんなことができるとは夢のようです」

天明「なあ、お前、ここには飲み物も何もありませんだよ

だがここはすばらしく澄みきった光の世界だ

時間の流れはゼロ、騒音もゼロなんだがこれでも

お前のいる現界のことは一部始終わかるんだよ

三心三蔵といってなあ、現界の個人情報だ

文字・数・色という心の蔵に収集されて
すべてをモニターで知ることができるんだ」

三典「それじゃ今、広島のおサダ姫たちと進めている
あなたの広島展のこともわかっているの？」

天明「もちろん一部始終わかっているよ」

それからお前に一つ知らせておきたいことがあったんだ」

三典「何をですか」

天明「東北にこの僕と縁結びできている方がいるんだ

つる姫様が縁組してくれて

夫が田之助というんだが妻のいろは姫という方なんだよ

神示のことでは現界でお前の力になってくれる方だから

覚えておいてくださいよ」

三典「どんな方ですか、いろは姫とは？」

天明「僕の取り次いだ数字と文字を理解してくれる次元にいる方だよ
かなり以前から往来カードをそれもダブル式を持っているから

夫の田之助は時々こちらにやってくる」

三典「つる姫様はどんな方ですか？」

天明「天の川から特命大使として心の国に派遣されて来た天の川の姫様だよ

専用のいのち舟で天の川の支流『元安川』を下ってきたんだ

広島の中央を流れている川で、お前も知っているだろう

その川の元安橋までやってきたんだよ

僕は天の声の指名でスイスのユングと二人で

つる姫様のいのち舟に乗ることになったということです」

三典「何もかもが、夢の夢！

あなた、しばらくここに居たくなってきたわ」

天明「おいおい！

それはまだ早いぞ

いずれ必ず心の国に永住することになるから

それまでは現界でマイペースで過ごしてくださいよ

僕が呼ぶまで来るなよ

時には往来カードを使って来るがいい
現界も捨てたもんじゃないだろう

また元気な顔を見せにやって来いよ」

「三典」はい、わかりました。じゃ、またね」

二人は再会の約束をして別れました。岡本夫人が原子雲のベールの手前で往来カードを提示してそこを抜け出ると、何もかもが一気にせわしなく動きだし、騒音の交差、ピルの林、車の混雑、時間は流れ、人々はせかせかと忙しく、ひまなく動く姿が迫ってきました。心の国とはまるで逆の世界ですが、これに慣れたら慣れたで、退屈もなくいいものです。

岡本夫人は、複雑な思いが去来する中で、これから何か信じられないようなことが起きるのではないかと、感じていました。

夫の居る心の国から現実世界に戻ってみれば、全身に吹き付けてくる音のジャングルと、そして夫のいる静止世界の心の音が体の内から二重奏となって、これまでに体験したこともない奇妙な感覚の中にあつた岡本夫人は、夫のいる心の国が現実なのか、今、自分が立っている世界が現実なのか、どちらが実像で虚像なのかと思考が揺らいでいました。

どちらも夢なのかもしれない、けれど、夢なら消えるはずなのに、見渡す情景は容易に消えそうもなく、むしろ、変化に富んで目に映ってくるのです。

夫とは確かに話をしてきたし、その内容もはっきり覚えています。「また折を見て訪ねて来いよ」とまでも言われてきました。東北（酒田）のいろは姫のこともはっきり記憶しているし「必ず力になってくれるから」と、念を押されてもきました。

夫の世界も実像の世界で、夫も元気でした。そして、今立っているこの世も紛れもなく実像なのだと言った岡本夫人は思いました。二つの世界が実像として併存していることに疑問の余地などないように感じました。

また、こうして独りで思うことでさえも、夫のいる心の国に、個人情報として、休みなく、それも三心三蔵という心の蔵に収納されていて、そればかりか、文字・数・色の三つの蔵には三心クルーとして、かずたま姫、もじたまの皇子、いろたま姫という担当者まで配置されているのです。

夫のいる所はすごい世界。いつかその日が来たら必ず呼ぶからそれまでは元気でないさい、と言われ、帰りたくないと言ったら優しく諭されてこうしてこの現実社会に戻さ

れ：

岡本夫人は、これまで体験したことのない不思議な二層次元の渦の中にありました。

どれほど経ってからでしょう、岡本夫人はやつと気を取り戻して我に返り、広島で開くべく、天明展の進行手順に心を移すことになりました。広島のおサダ姫に、電話での手配や、展示絵画のこと、案内状のこと、会場のこと、日時のことなどを話めていき、準備の大枠がほぼでき上がったのは、六月下旬のことでした。

その流れに添うかのように、全国に配信された新聞掲載で、天明絵画展を含めた記事が報じられました。そこには、三重県孤野の至恩郷について、岡本天明の自動書記の内容が二日連続で紹介されていました。

平成五（一九九三）年七月九日の山形新聞でそれを見た田之助は、何となく気を引かれながら、それほど、関心は持ちませんでした。一三日後の七月二日に友人の店に立ち寄ったときのこと、田之助が寄ったらぜひ見せたいと思いついておいたという新聞の、「神々の変容」と見出しの付された記事の終わりころに、「おサダ姫（小田女史）」の名前を見つけました。

田之助は、昨年ソウル・ツアーで一緒になった広島のおサダ姫ではないかと思い、連絡して確かめてみるとやはり本人でした。心の国の流れが、現実世界の流れとなってきたのです。心の国で動いていた三重と広島動きを、東北（酒田）の田之助は何一つ知らなかったのに、新聞記事を介して、運命的方向性の幕が開いたのです。

田之助から電話を受けたおサダ姫は、広島天明展の共催者ではありませんが、実質上の総責任者だといいます。ぜひいらしてくださいと、田之助は誘いを受けることになりました。平成五年八月六日、会場は「エソール広島」。

ソウル・ツアーで一緒だった人たちが、エソール広島を会場に選ぶとは、「ソウル」という感覚表現には深い共振共鳴の魂の結び合いが秘められていました。そしてまた、魂は英語で「ソウル」です。

さらに八月六日は、人類史上最大といえる非人間的悲劇、昭和二〇年に広島に原爆が投下され十数万の尊い命が犠牲となってから四八回目の平和記念式典が行われる日なのです。

心の国では、つる姫を囲んで、モニター画像の前で、七人揃って一四の瞳が、次々に送られてくる現実界の情報に見入っていました。つる姫を中心に、ナビ大王、かずたま姫、もじたまの皇子、いろたま姫、客人のユングと天明、合わせて七人が、黄金に輝く

いのち舟に浮かぶ姿は、平安大調和の七福神です。

縁結びの特命大使として天の川から派遣されたつる姫は、指令された縁結びのすべてを終了しました。ユング、タマヒロ社長、天明夫妻、田之助夫妻、そして、広島のおサダ姫の七人です。こちらも七人揃って七福人の祝いとなりました。

心の国の心の大地が土台となって、その大地で育った心のつる草が心の光を放ちながら飛び交う情景は、夜の川辺に乱舞する蛍火のように、縁結びの出会いを求めて飛び交っているのでしょう。

現界では、オサダ姫から広島天明展の誘いを受けた田之助が、妻のいろは姫と相談を始めていました。八月六日といえば間もなくのことです。田之助には多少の迷いはありましたが、妻は乗り気でぜひ行ってみたいというので、行く準備を始めることにしました。急な話ではありますが、心の国の動きが時空を越えて現界に具象することを思えば、一筋の流れに乗っている姿こそ現界の流れ、広島での平和記念式典当日となった天明展に向けて動き出すことになったのです。心の国からは天明が動きだし、現界では田之助夫妻ら数名が広島行きに動きだし、広島ではオサダ姫たちのグループが立ち上がり、そして、至恩郷の岡本夫人たちが天明展開始三四年記念に動き出したのです。

心の国の天明は、それら一切の動きをいのち舟の中からモニターで見えています。先ほどから七福神の姿で、つる姫一同もモニターで地上現界の一連の動きを見えています。

つる姫は、任務も終えて心休めをしています。天の声がいつ降りてくるかもしれません。どのように声をかけてよいやら天明は迷っています。これまで、最大のいつくしみの中で一緒に過ごしてきたのに、どのようにお礼を伝えたらよいものやらと思案をしていたちようどそのとき、万感が停止したかと思うと、天上から宇宙を包みこむエコーを伴いながら、威厳に満ちた静かな声が響いたのです。

天の声「つる姫よ、つる姫

変わりはなにか、ご苦労であった

姫の任務はすべて終了した。八月六日に帰還しなさい

四八回平和記念式典が終わり次第帰還しなさい

そのときユングも一緒に天の川から特製のいのち舟を提供するから
支流のライン河でスイスの故郷に行くのだ

天明も夫人とともに天の川の招待日を待たれよ

一同ご苦労であった」

そして、天の声は消えました。

つる姫は、懐かしい親様の声を聞いて目がしらが熱くなっていました。心の国が一段と懐かしくなっていました。重要な縁結びの役選ばれ、天の川から降りてきた場所が広島であり、元安川であり、人類史上最大の洗礼を受けた万霊万魂の中、心地であること、帰還の日が目前にあること、万感を胸に秘めたつる姫は、一心に祈りの姿となって、いのち舟の中央で両手を組んで正座をしていました。

天明は、天の声で中断していたつる姫へのお礼を、再び考え始めていました。つる姫の喜ぶお土産をどれにしようか、何にしようかとあれこれ考えても、どうしても良い案が浮かんできません。そして、考えを止めた一瞬、天明を貫いた一条の光がありました。その光は、生まれ故郷の「倉敷市玉島」の方角に飛んでいきます。

「そうだ、僕は倉敷市玉島でこの命をいただいたのだ。生まれ故郷の温もりのある物つて何だろうか、つる姫様が喜ぶものって何があるんだろうか」と、懐かしいふる里を思ったとき、幼いころの思い出が走馬灯のように天明の全身を流れました。

良寛和尚が残してくれた「良寛てまり」はどうだろう、倉敷にも歴史のある「倉敷はりこ」がある、いや、有名な「首振り虎」はどうだろうか、二転三転していたとき、

天明は東北（酒田）のいろは姫を思い出したのです。

いろは姫とは、数字と文字のひびきで、心の国での縁結びをつる姫様からいただいている仲ではないか。現界ではお会いしていないが、往来カードを持っているから、ナビ大王に頼んで呼んでもらおうと思い、

天明「ナビ大王様お願いします」

宝船『食心丸』のいろは姫とコンタクトしたいのですが」

ナビ大王「わかりました。かずたま姫からすぐに連絡させましょう」

ナビ大王「ナビ大王、いろは姫がまもなくこちらへまいります」

とその時、不思議なことに天明のまわりには誰もいなくなっていました。

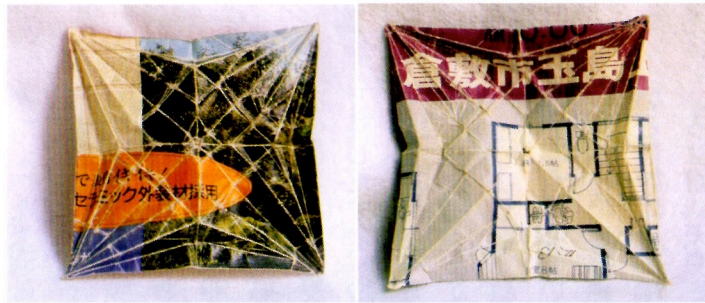
いろは姫「天明さん、しばらくでした。奥様とお会いしたこと、知ってるわよ

元気は何よりです

それで急な用件とは何でしょうか」

天明「いろは姫さん、ありがとう」

つる姫様が八月六日、天の川へ帰ることになりました



「倉敷市玉島」の文字入り広告紙

お礼のお土産が決まらず頭を痛めていて
『良寛てまり』はどうかと思おうし

倉敷はりこの『首振り虎』はどうかと思ったり…」

いろは姫「天明さん、良寛てまりはまだしも、

首振り虎はいけません。つる姫様ですよ」

つる姫様の喜ぶ物は何だろうかと考えていたいろは姫にひらめきが流れました。

いろは姫「折鶴よ、折鶴が一番よ

世界に平和を届ける折鶴以外にないですよ！」

いわれてみれば、つる姫には折鶴が一番ふさわしいと天明も思いました。八月六日は
平和祈念の日でもあります。

いろは姫「天明さん

それから心の国のこと、現界の人々は半信半疑です

魂が生きていることを信じていないのよ

天明さんが一心に思ってくれていても信じる人は本当に少ないの

ここであなたが死んでも

生きていることを知らせなくちゃ駄目よ

人々は亡くなるとただ煙になって消えると思ってるんで

す

魂は不滅であることを知らせてあげないと駄目です

だから折鶴もただの紙ではいけません

天明さんであることを

はつきりと証明できる紙でつくるの

あなたが生まれた

『倉敷市玉島』の文字が入っていれば最高よ」

鉄の一心でいろは姫が見せる一步も引かぬ様子に、天明も同調
しました。

その頃玉島地区では建て売り住宅が進んでいて、新聞の折り込
み広告の中に分譲の案内広告が入っていました。カラーの両面刷
りの大版で、驚くなかれ、『倉敷市玉島』の文字が大文字で印刷
されていたのです。これ以上の紙はありません。この一枚で折鶴

をつくった天明は、これを持って最上の気分でつる姫にあいさつをしました。
天明「つる姫様、親様からいよいよ帰還通知が入ったとのこと
名残りがつきません

これまでお世話いただきありがとうございました
お礼に一羽の折鶴を持参しました。天明自作の名入りの折鶴です
生まれ故郷の『倉敷市玉島』の文字を入れました
どうぞお受け取りください」

と差し出すと、つる姫は両手ですくうようにして受け取り、
つる姫「最上の贈り物をありがとうございます」

天明さんが生まれ育ったのは倉敷市玉島でしたか
これ以上のお土産はありません

うれしくいただきます、ありがとうございます」

つる姫の喜びに触れることができ、いろは姫も胸をなでおろしました。帰りぎわ、
いろは姫は天明に、

いろは姫「天明さん、つる姫さまの喜び、何よりです

それから、私たちも八月六日の天明展に参加して
平和公園に参拝をします

そこでまた会えたらいいですね」

天明「いろは姫、ありがとう

僕は元安橋の上でお待ちしています

時間は一二時一三分としましょう」

いろは姫「さすが天明さん

一二時一三分とは日月神示の真髄ですね

太陽暦は“一二カ月”で陰暦では“一三カ月”で

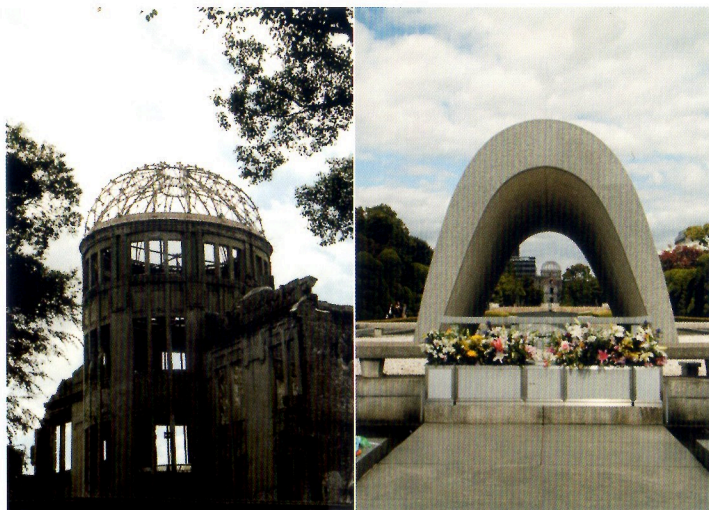
『一二—一三』で一年がめぐってきます

自然律の中でまた会うわけですね」

天明「その通りです

ご理解いただきありがとうございます大変助かりました
では八月六日まで……」

と言って、二人は別れたのでした。



原爆ドームと慰霊碑

ます。東北（酒田）から夜行列車で駆けつけたいろは姫一行は、会場において、ソウル・ツアーで一緒だったオサダ姫と再会することができました。さらに、心の国で紹介されていた岡本夫人、三典とも初対面のあいさつができました。会場は次々入場する人々で混みあっていました。オサダ姫の心遣いで、いろは姫一行は、初めてだった広島を車で案内してもらいました。原爆の猛威からも難を逃れたという比治山公園にも行き、そこからは、街を一望できて、当時を偲びました。

いろは姫一行は、平和記念公園でオサダ姫と別れた後、式典も終了した公園内を通り過ぎて、折鶴のモニュメントを天高くかかげた原爆の子の像に立ち寄り、そして、原爆ドームを前にし

いろは姫が帰って数日後、ナビ大王がつる姫からの伝言を伝えてきました。ナビ大王「天明さん、つる姫様が喜んでいましたよ

— 最上のお土産だと言って笑顔がすばらしかった

明日、八月六日はつる姫様の帰還の日であり

また四八回目の平和記念式典の日でもあります

お祈りを終えると、心の国ともいよいよお別れとなります

— 一旦いのち舟を元安橋に停止して

天明さんはここで下船していただくこのことです

ユングさんは天の川まで同行することになっています

いよいよ天明さんともお別れの時がきました

ナビ大王がクルーを代表して感謝します

では明朝まで…」

日付が変わって、平成五年八月六日金曜日、この日広島には、世界中から大勢の人たちが訪れ、第四八回広島原爆死没者慰霊式と平和祈念式が行われます。

広島駅からほど近い会場「エソール広島」では、広島天明展も予定通り開催されてい



元安橋（右奥）と原爆ドーム（手前）

た元安川に向かっています。

一方、つる姫が乗りたいのち舟は、元安川の上空にやってくる。原爆ドームを中心にして、広く大きくゆっくりと旋回しながら平和の祈りに入っていました。元安川の河原からは万霊万魂の御霊の光が上昇を始めています。その万霊の輝きは宝石の輝きとなつて天の川へと立ちのぼっていました。

やがて、つる姫のいのち舟は、元安川の上空で一旦停止すると、ゆっくりと下降を続けて川面すれすれで停止し、そこで黄金の光を三回点滅させて地上一面に光を放ちました。それは、天の川へ帰還するつる姫の別れのあいさつだったのです。点滅の合図が終わると同時に、いのち舟の姿は、一瞬にして消えていきました。目の前には、「元安橋もとやすはし」がありました。

周囲一带は安らぎのひびきで満ちていました。原

爆ドームは淡いブルーのオーラに、原爆の子の像も淡いブルーの安らぎのオーラに、元安橋と元安川の河原一帯も淡いブルーの安らぎのオーラに包まれていました。そして、橋の中央には、ひとときわ輝く光に包まれた「一羽の折鶴」が残されていたのです。

いろは姫一行は、元安橋の中ほどで、目の前に飛び込んで来た一羽の折鶴をすぐに拾い上げ、中を開いてみました。そこには『倉敷市玉島』と書かれた大文字が光りだし、その時「一二時一三分」でした。心の国で、天明というは姫が約束した時間でした。倉敷市玉島が天明（本名「信之」）の生まれ故郷であることを知っていたいろは姫は、これは、

「天明の魂が生きている証し」

なのだと思わせるために再び会場に戻り、岡本夫人に折鶴を差し出しました。

話を聞いた岡本夫人は天にも昇るくらいに驚き、差し出された折鶴を両手を広げてうやうやしく押しいただきました。亡き夫との結びつきに、万感胸に迫り、夫の魂が姿を折鶴に変えて「もとやすはし（元安橋）」の上で待っていたとは、広島平和記念式典の当日に、天から降りて来たのだと岡本夫人は思いました。

「僕は天明の信之です」

と、生まれ故郷の倉敷市玉島が、証しの文字に託され、岡本夫人の人生最大の運命的出

会いとなったのでした。

この折鶴との出会いによって、田之助の妻（いろは姫）にも著しい内的変化がありました。これまで、日常生活の中で、心結びの文字や数の文脈を容易に理解できなかった夫に代わって、天明の取り次いだ神示（日月神示）の第一六巻にこそ、妻の心を癒してくれる真実があったのです。これこそが田之助の妻の最大の理解者となったのでした。

特に、神示第一六巻の最初の一行の一六文字に、田之助の妻の心の内に共振共鳴する真実が秘められていました。

原文

一八十一のキ七の七の三　〇九十一八十八八三

解説文

言答開き成り成るぞ　誠言答は永遠ぞ

解説文

いわとびらきなりなるぞ　まこといわとはとわぞ

という書き出しの文面には、神示の真髄が凝縮されているというのです。その書き出し

の「二八十一キ」、すなわち「言答開き」であり、「岩戸開き」であり、その岩戸開きこそ「食心の目」であり、この食心の目こそ心の目であり、岩戸であり、扉開きという真意がそこにあるというのです。

「食がいのちになる次元」

この一点にこそ、神示第一六巻の眼目がある…

神示第一六巻に出会うことで、田之助の妻の人生にも運命的方向性が与えられたのでした。